

無教会の信仰と

キリスト教平和主義

— 日本人無教会キリスト信徒の歩み

此の度「日韓青年友和の会」の訪韓グループの一員として、初めて皆様の集會に参加できましたことを、まことに有難く、うれしく存じております。

多分私がグループの最年長ということに立つことになったと思いますが、そしてそのことを大へん光榮に存じています。が、何分期日も差迫つてからのご指名であつたので、どのような話をすべきか困惑しました。結局ここに掲げたような題で話しすることにしました。甚だ個人的な事柄をお聞かせすることになると存じます。失礼の段はどうぞ容赦下さいますようお願い申し上げます。

はじめに「内村鑑三との出会い

私の内村鑑三（一八六一—一九三〇）との出会いは、一九五〇年代の初め、たまた

ま友人の勧めで読むようになった『聖書講義』という雑誌とその主筆山本泰次郎（一九〇〇—一九七九）との出会いを通して与えられたものです。

当時私は既にある福音派の「教会」に属していましたが、その実利的信仰の有り様に次第に疑問を抱くようになっていたので、『聖書講義』という名称通りの純粋な聖書講義は実に新鮮で、私はその明晰、直截な講義によって全く新しく福音を学び直したのでした。やがて山本先生の個人的知遇も得て、私は先生を私の唯一の信仰の恩師として今日まで生きてまいりました。なおこの一連の出来事のために、私は一九五六年にはその「教会」を離脱せざるを得ませんでした。

ご存知の方もあろうかと思いますが、山本泰次郎は内村の晩年十年直接に師事した独立伝道者で、恐らく数ある内村の弟子たちの中でも最も多く内村について書いた人であると思います。私はこの山本先生に紹介されて内村の著作を読むようになり、先生に教えられて内村を知るに至った者です。ですから、これから申しあげる私の内村観のどれ一つとして先生に負わないものはあ

りません。

因に『聖書講義』誌一九三七年四、五月号には金教臣の寄稿が二篇掲載されており、当時親交のあつた二人はそこで「無教会論と非戦論」について意見を交わし、互いの共通理解を喜んでいきます。きょう私は同様の題目の話をするに、不思議なつながりを感じております。

では私はどのようにして内村と出会ったか。以下三つの点を、内村自身の言葉の引用によって述べてみます。

前述の実利的信仰とともに私が「教会」の中で強い違和感を覚えたものに、教会的仲良し主義とでも言うべきものがありました。その雰囲氣に辟易していた私は、内村の「神の前に独り立つた裸のわれ」という言葉や「単独の勢力」という文章に感激しました。私にとって無教会主義とは何よりもまず「独り主義」のことで、内村が私に教えてくれた最も大切なことはこの一事に尽きると考えています。そして私のような意志薄弱の人間が、集団主義の日本の社会で何とか信仰を保って生きてくることができたのは、ひとえにこの独り主義のおかげだと感謝しています。

われは独りである。われの行くべき

の教会はない。われを教え導くべき教師も牧師もない。われと哀楽を共にするの会友もない。われはいたってさびしき者である。

しかしわれは独りではない。神はわれと共にある（ヨハネ八・二九）。彼は時々彼の聖霊をもってわれを見舞い、彼の偉大なる奥義をわれに示し、われ独りあるも万有をしてわれの同伴たらしむ。

そういうわけで、五十年前「教会」を出た時、私は「教会を出て、無教会に入る」などとは考えもしませんでした。私の恩師山本先生は「無教会」に対し極めて批判的であつたし、そもそも私は先生の集會に出席したこともありませんでした。公開の集會は別として、無教会の集會というものも殆ど知りませんでした。とにかく私はその時「教会」という衣を脱ぎ捨てて、「神の前に独り立ったる裸体のわれ」になつた解放に喜び躍つただけでありました。「教会」は無くなつたのです。

第二は聖書に関してです。内村は言います。聖書を読んで、永久の利益がある。聖書を読んで、人は老いて老くない。

彼の心に永久の春がある。聖書を読むで、理想が尽きない。詩と歌と音楽とはその必然の結果として、わが口より流れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きない。もし世に神の言があるならば聖書を措いてほかにあるとは思えない。人類の所有のうちで最も貴いのは書籍であつて、書籍のうちで最も貴いものは聖書である。

聖書の研究なり。その批判的研究にあらず。また感情的探求にあらず。聖霊により、常識をもつてする、深き静かなる研究なり。あらゆる思想に訴え、あらゆる事実に鑑み、宇宙と人生とを支配する神の聖意の探求なり。聖書の研究はすべての研究の中に最も広くして最も深き研究なり。實在の中心に達せんとすることなり。愛をもつて万有を解せんとすることなり。

私はおよそ読書とは縁遠い青春を送つた人間ですが、この内村の言葉に教えられ励まされて、聖書に出会い、ために知識欲が増し、あらゆる思想、あらゆる事実に関心を広げ、詩歌と音楽を楽しみ、ささやかな

がら理想を追い求める人生を知りました。以来今日まで、聖書を「研究し」、その上教会や宗教に関係のないところで聖書を「教える」（伝道する）ことまで許されたことは、何と有難く幸いなことかと感謝にたえません。

三番目は、私を決定的に「内村の徒」にした次の言葉です。これは内村がその終生の友であつた札幌の宮部金吾に宛てた手紙の中の一文ですが、近況などを知らせたあとで、

小生は君と同室の時と少しも変らず毎日の勉強に御座候、是れのみは何よりの幸福に御座候

What is Christianity?

Is it worth having?

是れが矢張り最大問題に御座候と述べ、この問いに対する自分の解決は、キリスト教とはこの世に死ぬことである、それゆえにこれは信じるに足るものである、十字架にすべてのことの完全な解決があるとし、次のように言つて手紙を閉じています。

先ず毎日コンナ事に独りで頭を悩まし居り候、君の専門とは違ふなれども時には真理の発見に由り飛立つ程嬉し

き事も有之候

この時内村は既に五十歳に近く、『聖書之研究』誌は百号に達せんとし、その著書は各国語に翻訳され、名実ともに第一線のキリスト教伝道者・思想家でありました。その彼がなお「キリスト教とは何ぞや、それは信ずるの価値ありや」と日々苦闘している。それをキリスト信徒にとつての最大問題とし、この最も根本的な問題に、この一事に、これのみに集中して生きている。しかも、その事を徹底的に日常のこととして生命に溢れて生きている、ということに感嘆し、内村に対する敬愛を熱くしたのでした。自分はこの人のキリスト教を自分のキリスト教として生きて行こうと。

無教会の信仰―内村のキリスト教

内村の「キリスト教とは何ぞや」は「教会」に対する疑問から始まった私の求道において、「無教会とは何ぞや」という問いに重なります。以下申し述べるところは私の五十年にわたる「無教会（主義）」探求の軌跡であり、それは同時に私の内村鑑三観の一端であると、ご理解いただければ幸いです。

内村は幾つかの造語をもって自分のキリスト教を説明しようとした。十字架教、日本的キリスト教、独立的キリスト教など。「無教会（主義）」のキリスト教もその一つで、内村と言えば無教会と言われる程ですが、その内村に体系的な「無教会論」があるかといえばそのようなものはありませんし、実はこの「無教会（主義）」という用語にしても、その使用頻度は人が思う程に多くはありません。

「しかし」と彼は言います。「実質には名称以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である」と。

では、無教会主義の「実質」とは何か。「無教会主義について」という文章の中で彼はこう言います。少し長くなりますが引用します。

無教会主義とは、教会は有つてはならぬということでない。有るも可なり無きも可なりということである。神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取つて現われ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。生命はヘブライ語で言うルーアクである。風である。

息である。この風（ヨハネ三・八）の吹く所に神の生命がある。そして風に形態のないように、「霊によりて生まるる者」すなわちキリスト信者に形態がない。信者は教会員ではない。彼は神の風に吹かれて霊によれて生まれたる者である。彼が無形たるや言うまでもない。

生命は形態を取りて現わるるものであるから、神の霊が時に教会の形態を取りて現わるるは少しもふしぎでない。われらのはかかる形態を貴び、時におのが身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない。しかしながら神と形とが同視せらるる時に弊害は百出する。そして形が神を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる場合に起こる主義である。貴むべき、なくてならぬ主義である。

内村はこの無教会主義が「私の信仰である。私が無教会信者であるは、ある人が〇〇教会信者であり、またある他の人が〇〇教会信者であると同じである。これは私の便宜にかない、私の性質に合い、私の信仰を助くる主義であるからである」と告白し

ます。しかし同時に、

私はすべての人が私のごとくに無教会信者であらねばならぬと信じない。

私の無教会主義が私を救うのであるとは思わない。私は教会問題はキリスト

教の根本問題であるとは信じない。私は人に私の無教会信者であることをゆるしてもらいたいように、私は人がその欲する教会に入ることをゆるす。

と明言しています。

無教会主義は、それでは教会の洗礼・聖餐の両式についてどう考えるのでしょうか。

これについても内村は、「これに対して非常の尊敬を表する者」であるが、これが「救霊上の必要とは信ずるあたわず」として

これにあずかるはよし、あずからざもよし。要は、十字架につけられし神の子の贖罪を信ずるにあり。その他の事は細事のみ。

と言っています。

さらに聖職制度については、「聖俗差別の撤廃」を主張して、

その事は、聖が俗化する事ではない。俗が聖化する事である。聖ならざるものなきに至ることである。聖職と称して、神に仕うるための特別の階級が撤

廃せられて、すべての信者が聖職となる事である。すべての職業が聖業となる事である。われらはこの理想に向かって進むのである。

と言っています。

これを私なりに要約すれば、「無教会主義」とは、「人の救われるはその行為によらず信仰によるとの信仰の帰結として唱えたもの」であり、従って「まず第一に十字架主義の信仰、しかる後にその結論としての無教会主義」であって、どこまでも「信仰唱道のための主義である」。さらに別言すれば、それは「神は霊であるから、彼を拝する者も霊と真をもって拝すべきである」という原理（ヨハネ四・二四）に基づく「純粋に霊的であって、霊のことは霊によつてのみ判断される信仰」であり、その意味で「その論理的帰結にまで徹底されたプロテスタンティズム」である、ということになりましょう。

内村はその晩年、自らその主筆であった英文雑誌『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』に載せた「霊と形」と題する論稿の中で、こう言っています。

よりよい名称がないので、わたしはこの形なきキリスト教の形を「無教会

主義のキリスト教」と呼ぶ。(For lack of better name, I call this formless form of Christianity, nu kyokai-shugi-Kristotokyo, Christianity of no-church principle.)

(道家弘一郎訳)

内村はここで、日本という異教国にあつて、四十年間独力で宣べ伝えてきた自分のキリスト教について語ったのです。「無教会主義」という名称にこめられた内村の謙虚と、彼の自負と、彼のユーモアに私は感動します。

わたしが「教会」を離脱した時「アモス書」を読んできましたが、行動を共にした数人の友人たちとその勉強会を続けるに当たって、会場の固定的確保ができず各所を転々としました。そのため誰言うとなく、アモスの出身地名を取って「テコア会」と呼ぶようになりました。後にそれが集会名となった「テコア聖書集会」は、ごく少数の、細々ながらのキリスト教集会ですが、地味な聖書の勉強を続けて、来年でちょうど五十年になります。

山本先生は早くから「内村全集」編集の構想を持っておられました。それが実現した六〇年代から七〇年代初めにかけて、

私はそのお手伝いをする事ができました。教文館版『内村鑑三全集』は聖書注解、信仰著作、日記書簡、英文著作の四全集から成り、全五十七巻、内村のキリスト教を一望のもとにおさめ得る整然たる伝道的編集で、読者を益すること大きいものと考えます。私は全巻を通じる総索引の作製を担当したお蔭で、何とか内村の著作のすべてに目を通す事ができました。非力の私をお用い下さった先生のご恩に、感謝のほかありません。

教会を出て十年余、独りでいる私に、一致のしるしとして右手を差し出してくれ（ガラテヤ二・九）友人たちがありました。以来三十五年間、私は無教会の講座や研修所で、聖書研究をもつてする福音宣教に、継続して参加する事ができました。それが私の信仰生活をどれ程豊かにしてくれたことか――たとえば、教会・無教会を問わず多様な受講者との交わりを通して。友人たちに感謝なきを得ません。

序でながら、私の生業について一言いたします。初めて聖書に出会った時、どうしても英語の聖書が読みたいと思ったのがきっかけで、私は英語を勉強し、英語を教えるようになりました。正規の教師をした

ことはありませんが、英語塾を自営したり、講師として学校に勤めたりしました。おかげで常時若い人たちと一緒にいることができ、英語のみならず聖書を教える機会にも恵まれました。先程も引いた「霊と形」という論文の中の次の内村の言葉が、私を励ましてくれました。

わたしは、内面的には霊において神を拝し、外面的には通常の人間的行動において神に仕える。

キリスト教平和主義―内村の平和思想

今朝の話の後半は、キリスト教平和主義についてですが、まず私の軍隊体験からお話しいたします。

私は一九二七年の生まれですが、この年は日本に新しい兵役法が施行された年で、以降三一年には満州事変とともに「十五年戦争」が始まり、二・二六事件、日中戦争を経て、四一年太平洋戦争に突入という軍国主義の時代に育った典型的な軍国少年でした。当時私は旧制夜間中学の生徒でしたが、配属将校の「お国の為」という叱咤に追われるようにして海軍を志願し、四三年十二月飛行予科練習生として航空隊に入

隊したのです。それから一年半の教育を受けて、四五年五月に任官しましたが、間もなく敗戦、除隊。十八歳でした。

私の体験は、いわゆる戦争体験ではなくて軍隊体験だけですが、しかもまだ若年で何もわからなかったのですが、戦後キリスト教平和主義に立つようになって、その生活を省みた時、それは私に実にさまざまなことを考えさせる、いわば私の「原体験」と言えるものになったのでした。私にとって嫌な思い出ですが、貴重な体験でした。いろいろありますが、かいつまんで三つの事を申し上げます。

第一は軍隊の偽善性ということ。あの時私は強制的に書かせられる「自省録」という日記に、誠実を旨とすべき軍隊で、軍人勅諭をもじって「軍人は要領をもって本分とすべし」などと言われているのはおかしい、と日頃の思いを正直に書きました。それが検閲の班長の癪にさわり、気絶する程の制裁を受けました。「天皇の軍隊を批判するとは生意気だ」という罰でした。建前と本音は別の軍隊の偽善性を身をもって知った事件でした。

第二は軍隊生活の醜悪さです。その著しい例は、集団の為には個は全く顧みられな

いということ。特に不器用で何をやっても、うまくできないような弱い人間を徹底的にいじめる、それによって集団の志気を鼓舞しようとする卑しい集団主義です。

第三は擬似精神主義ということ。日本人は何かというと精神とか心を強調しますが、それが本当に精神を高め心を豊かにするものではなく、徒らに非合理的な感情を煽るに過ぎないことが多いのではないかと軍隊における「特攻」(私は特攻機を見送りました)とか「玉砕」などは、正に擬似精神主義の最たるものと言うべきでしょう。

こうした軍隊の特性は、実は日本人の心性そのもののように思えます。そして戦後六十年経った今も少しも変わっていないように思えるのです。私は先にも申しましたように長らく教師を勤めました、教師としての最大の願いは、この若者たちが二度とあの愚かで残酷で無益な軍隊生活を体験することがないように、ということでした。

私が山本先生に出会って程なく、先生は内村の非戦論関係の論文を編集して内村鑑三著『非戦論』という本を出されました(角川文庫、一九五三年)。私は確かにこの本によってキリスト教平和主義に開眼したの

ですが、そのことの重大さを自覚するようになったのはずっと後のことです。

ここでまず、その内村の非戦論(平和思想)を素描しておくことにします。内村はその生涯に三度の戦争(日清、日露両戦争と第一次世界大戦)を経験し、ために終生深く戦争と平和の問題を考えた人でした。

よく知られているように、彼は最初は義戦論者で、日清戦争では英文で「日清戦争の義」を綴り、日本の正義を世界に訴えました。しかし事志と相違して、その戦争は「欲戦として」終わった。戦勝を誇る国民に憤慨した彼は、十年後の日露戦争では、今では平和思想の古典的文章として知られる「戦争廃止論」を引っ提げて、非戦論者として立ち上がりました。

余は日露非開戦論者であるばかりでない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。

世の正義と人道と国家とを愛する者よ、来たって大胆にこの主義に賛成せよ。

「この主義」すなわち「絶対的非戦主義」

を宣言して、彼はさらにこう言います。

世に「義戦」ありという説は、今や平和の主を仰ぐキリスト信者の口にはすべからざるものであります。私自身は今絶対的非戦論者であります。

平和は決して戦争を通して来たりません。平和は戦争を廃して来たります。武器を置くこと、これが平和の始まりであります。

また彼は、非戦主義者になった由来を述べて、自分の生涯に体験した「無抵抗主義の利益」と、「過去十年間の世界歴史」とを挙げていますが、これは彼の平和思想が決して宗教的信念や観念的哲理だけに基づくものではなく、人生経験や社会・歴史的考察にも目配りした甚だ堅実なものであったことを示しています。それがあらぬか、このころ既に「人類の進歩とともに戦争の害も増し加わり、戦争は勝っても負けてもその目的を達することはできない」と論じ、「戦争の非理と損害とを唱え、万国共通してこれを廃止し、これに代うるに仲裁裁判をもつてせんこと」を提唱してもいます。しかし一方で、内村は「戦時における非戦主義者の態度」を説いて、一見非戦論の

後退とも見える「非戦主義者の戦死」という甚だ過激な文章も発表しています。これは非戦主義者は自分の嫌う戦争の犠牲となれ、戦っても敵を憎むことなく、その戦死が贖罪の死となることを願って、死に至るまで平和を祈れ、と勧めるものです。阿部知二はその著『良心的兵役拒否』（岩波新書、一九六九年）において、これを「良心的戦死といふべき宣言」と呼び、批判的ではありませんが、「世界にも類を見ないであろう」と評しています。

第一次世界大戦は、内村に甚大な衝撃と失望を与えました。それはキリスト教国挙げての大戦争であり、教会も一斉に賛成し、米国までも参戦するに至ったからです。彼は叫ばざるを得ませんでした。

戦争は悪事であると同時に刑罰である。負ける戦争ばかりではない。勝つ戦争もまた刑罰である。国家は戦争に従事して、負けるも勝つも、神の刑罰をこうむりつつあるのである。

内村はここに改めて「戦争廃止に関する聖書の明示」を学び、非戦の唱道は絶えず為すべきだが、戦争はそれによって止むことはなく、神の大能の実現によってのみ止む、ただキリストの再臨のみが世界の平和

を可能にする、という確信と希望を語るに至ります。

キリストのみが真の平和主義者である。絶対的平和を唱えて、完全にこれを実行し得る者である。ゆえに、彼の降臨を待たずして、世に平和はおこなわれぬ。世界の平和はひつきようするに、キリストの再臨を待って初めて世におこなわれるものである。

さらばその時までわれらは平和の唱道をとどむべきであるかというに、そうではない。われらは平和の実行を見んがためにあらず、平和を証せんがために、時を得るも、これを得ざるも、怠らずして平和を唱うべきである。希望をもって、大胆に、非戦的平和論を唱うべきである。

最後に、これは『非戦論』には収録されていませんが、内村の平和論の延長線上に展開された彼の文明論とも呼ぶべき「新文明」と題する英文の論稿を紹介したいと思います。

彼はまず、文明がもし何らかの意味をもつとすれば、それは西洋文明のように、強力な軍備に守られなければ存在しえないようなものでなく、預言者イザヤの「平和預言」（イザヤ二・四、一一・六、九）が明示

したような、戦争のない世界の状態でなければならぬ、と論じます。しかるに「わたしの愛する祖国」はどうか。明治時代に未熟にも「文明とはいえない西洋文明を、そっくりそのまま受け容れてしまった！」^{あはれ} 剩^{あはれ} え西洋式戦闘法の採用によって三度戦争に勝利し、列強に伍する地歩を占めた。しかし、それとともに全世界の愛を失った。いまや日本国民は世界いたるところで恐れられ嫌われているのではないか、と厳しく批判しています。そして「今こそ」と、彼は熱誠をこめて勧めます。

日本は眠りから醒めるべきときである。膨大な軍事予算をとまなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならぬ。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めなければならぬ。それは戦争のない文明であり、二十六世紀前、神の預言者によって宣べられた神の政策によって、「キリスト教的」欧米の指導者となるような文明である。

内村は福音の使者であって預言者ではありませんが、これは彼の死から七十五年になる現在の日本に向けられた何という適した預言、また適切な警告であることでした。

よいか。そして、彼の永眠四年前のこの文章の次の結びの言葉は、私には日本人に対する内村の遺言であるように思われます。

わが日本が国家的宣言を發して、五十年前武士の武装解除をしたように（一九七六年の廢刀令―筆者注）国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であろう。（道家訳）

先に私は、若き日の軍隊体験をお話ししましたが、それが私の原体験となり得たのは、今申しあげてきた（どこまでも私なりの理解ですが）内村の非戦論に出会ったからこそであることは言うまでもありません。こうして私はキリスト教平和主義を自分の信仰生活の指針とするようになったのですが、いずれも内村との出会いによるという意味で、私にとつては無教会の信仰に生きることと、平和主義に生きることとは一つのことであると思つています。

そこで次に、私自身の平和についての考えを私自身の言葉で申しあげてみたいと思いますが、その前に内村以外にこの点で私が多くを負っている三人について一言いたします。

一人はR・H・ベイントン（一八九四―一九八四）という人で、私は一度だけ友人を介してお目にかかったことがあります。彼はクエーカーで、「Christian Attitude

toward War and Peace"（日本語訳『戦争・平和・キリスト者』中村妙子訳、新教出版社、一九六三年）という本を書いてあります。その原題通り、キリスト教と平和問題との関係が歴史的、具体的に詳説されていて、私はこの本によって、キリスト教平和主義の全体像を把握することができました。

次は有名なM・L・キング（一九二九―六八）です。私は英語教師をしていましたので、よく英語クラスのテキストに彼の『"Strength to Love"』（日本語訳『汝の敵を愛せよ』蓮見博昭訳、新教出版社、一九六五年）という説教集を用い、学生達と一緒に勉強しました。「平和の精神をイエスに学び、その方法をガンジーに習った」という彼の「非暴力抵抗」の思想と行動、それを支えている彼の贖罪^{レペント}愛の信仰に深く教えられました。

三人目は「韓国のガンジー」と呼ばれ、韓国民民主化運動の指導者であった咸錫憲（一九〇一―八九）です。その著『意味から見た韓国歴史』（日本語訳『苦難の韓国民衆

史』金学鉉訳、新教出版社、一九八〇年）から、自民族を世界の下水口に擬する激しい民族愛と、苦難に意味ありとする深刻な歴史観を学びましたが、一方晩年の先生からは民族主義・国家主義の克服を教えられました。自ら「シアル」（「民衆」を意味する造語）に徹しられたその人間性にいたく魅せられました。

そこで私自身の平和理解についてですが、私は最も基本的には「平和」と「平和主義」とは別のものと受け取っています。平和は「あらゆる人知を超える神の平和」（フライリピ四・七）であつて、キリストが私どものうち（間）に実現して下さった絶対の恵みでありますが、これに対し平和主義は、その平和に与った者が、自らも平和に生き平和を作り出していきたいと願つて為す一つの信仰的決断です。従つてその表現も多様で、どこまでも相対的なものであるに過ぎません。ですから私どもは、平和の終末的到来を固く信じつつも、私どもの平和主義くらいで平和が実現するなどと思ひあがつてはならないと思ひます。

ではキリスト教平和主義の原理はどのようなものか。私は次のパウロの言葉と内村の短文を挙げたいと思ひます。

わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています。(ローマ五・一)

平和はわれらの始めであってまた終わりである。目的であってまた方法である。キリスト信者の所有を総括したものが平和である。彼の全性にしみわたり、彼の生涯を支配するものが平和である。(内村)

さらにキリスト教平和主義の根拠は、と問われれば、ベイントンも言っているように「山上の説教」にあると答えることに異論はないと思います。「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ五・九)は、キリスト教平和主義者の決意表明と云ってよいでしょう。そして「悪人に手向かつてはならない。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(同三九、四四)というイエスの無抵抗主義は、キリスト教平和主義そのものです。またイエスは「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(同二六・五二)とも言っておられます。これらイエスの教えに呼応するパウロの言葉も引いておきます。「愛する人たちは、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は

わたしのすること、わたしが復讐する』と主は言われる、と書いてあります。悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマー二二九、二一)。

なおキリスト教と戦争との関係について一言付け加えるならば、歴史的キリスト教は、初期の教会は別として、むしろ戦争には親和的でした。聖戦論(十字軍主義)や正戦論(正義のための戦争の容認)がそれです。これに対し平和主義^{ペイク}は、再洗礼派などむしろ傍流と言うべきキリスト教の中に受け嗣がれてきたもので、非戦、非武装、非暴力主義に立ちます。「良心的兵役拒否」なども含めて、この平和主義がキリスト教においてある位置を占めるようになったのは、せいぜいこの百年くらいのことではないでしょうか。

先刻申し述べたような軍隊体験をした戦争世代のひとりとして、私は次第に日本人の戦争責任を考えるようになりました。その直接の契機は、幸運にも「YMCA」(その英語学校の講師として)や、「日本友和会」(キリスト教非戦平和主義の団体、その会員として)、あるいは各種市民平和運動(その会員として)などのスタディ・ツアー

に参加して、沖縄をはじめ韓国、東南アジア、台湾、中国などアジアの国々を訪問し、現地で現地の人々から直接に戦争の体験談を聞くことができたことでした。彼らの証言と、その事跡の見聞を通して、日本の軍隊がいかに非人間的な残虐行為を行ったか、日本の侵略がいかに非道無法なものであったかを知り、痛切に日本人の戦争加害責任を自覚させられ、彼らに対する謝罪の念を深くしたのでした。

ことしは韓国の「光復」六十年、韓国国交回復四十年という歴史的に節目の年にあたりますが、私が集中的に数回訪韓したのは八〇年代のことでした。すべて日本友和会の「平和の旅」という謝罪と和解のための学習・交流旅行で、毎回韓国側で準備された聖書中心の「夏期修養会」に参加しました。そのあとは、日帝時代の旧跡(堤岩里教会や独立記念館など)を巡って、植民地支配(皇民化教育、神社参拝、創氏改名、朝鮮語禁止など)の実態を勉強し、韓国の文化を学び、観光も楽しみました。日本人の罪責に恐縮する私どもに対して示された、韓国の主に在る友人たちの身に余る寛容と和解と歓待とを、私は忘れることができません。

この旅行の大半はまだ軍政下でのことでしたから緊張もしましたが、民主化運動の一端にも肌で触れることができ、苦難の中で自由と平和のために奮闘する多くの尊敬すべき人士に出会い、実に学ぶところ大であったと感謝しています。

今回も金英雄先生から「韓国の一キリスト者より日本の友へ」と題する貴重なご発言を伺いました。いまご指摘の一つ一つの項目について応答する余裕はありませんが、先生の日本人に対するご批判の趣旨はよく理解できましたし、その多くの事柄は全く言われる通りで、ひとりの日本人として心が痛みます。ここで申しあげることが出来るのは、「私共の間に完全な赦しと和解の道は未だ程遠い」という先生のご認識を共有しながらも、「互いの考えを真剣に打ち明け、その違いを理解し受容し合おう」というご提言に、全面的な賛意と深い敬意を表したいと存じます。

話を元に戻しますが、私は八〇年代の韓国訪問の折に咸錫憲に出会いました。先生については既に申しましたように、私の平和思想形成にとって欠かすことのできない恩人ですが、そのお話も書かれたものもなかなか難かしく、内容を理解できたなどと

はとても申せません。ただいつも、先生の思考のいかにも柔軟なこと、聖書やその他の古典（老子とか荘子）の読みの深いこと、その淡々たる話しぶりに感銘を受けたことでした。韓国では江華島の山道で、あるいはソウルの地下鉄の車中で、そして日本でも沖縄でもご一緒させていただく折があり、個人的に親しくお話を伺うことができませんでした。先生の平和なたたずまいは、いつでも変わることはありませんでしたが、時折穏やかでユーモラスなもの言いのの中に、厳しい日本（人）批判がこめられていることに気付いて、はっとさせられたことでした。咸錫憲の信仰については、韓国でも日本でもいろいろと批判があるようですが（崔正一先生のご講演でも言及がありました）、今朝の私の話「無教会の信仰」に関連させて、先生の言葉を一つだけご紹介し、私の先生に対する敬愛のしるしとしたいと存じます。これは先生が岩波書店の『内村鑑三全集』月報39（一九八三年）に寄せられた一文「私の知っている内村鑑三先生」から私が恣意的に抜き出したものであることをご諒承下さい。

私はもともと無教会を知っていて内村先生のところに行ったのではなく、

先生のところに行つて無教会になりました。しかし、無教会であるならば、こり固まってははいけません。人は生きていく限り何らかの形をとらざるをえませんが、なるべく形式にこり固まってしまうないように努力するのが正しいと思います。厳密な意味で、無教会は内村においては生きていました。しかし、後の人には自分自身の無教会がなければならぬのです。

内村は私の中に永遠に生きています。もちろん偉大な内村のすべてを私が知っているとは言えません。しかしまた、すべてを知る必要はありません。私が入村から、私なりに吸収して生きていけば、それでよいのです。私が生きていく限り、内村も私の中で永遠に生きていくのです。これが無教会精神だと私は信じます。（高崎宗司訳）

最後に、平和主義と「日本国憲法」との関連について、私の考えを簡単に申しあげます。

戦争に敗れた日本人が、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意して確定した憲法」

には、その第九条に、戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認を定めた平和条項があります。幸いなことに、戦後六十年日本は政府の行為としての戦争はしたことなく、従って交戦権を行使したこともありません。

しかし、「戦力の不保持」はどうかと言いますと、これは全く守られていません。陸海空の「自衛隊」は軍隊ではないと説明されますが、それは詭弁で、自衛隊は最新鋭の兵器を保持する世界有数の常備軍で、れっきとした軍隊です。それが今や重武装してイラクへ派兵されているというのが実態です。こうした憲法の規範と実態の余りにも明白な乖離を、私は「国家的欺瞞」と呼ばざるを得ないので、大半の日本人はこの事にさしたる疑念も懸念も抱くことなく、そればかりか、日本は平和憲法があるから平和な国だと一國平和主義に安住しているかに見えます。一方権力はそれをいいことに、規範を実態に合わせる憲法「改正」を企図している、というのが日本の現状です。

このような事態に顕著に表れている日本人の心性……不誠実と傲慢は、一方現下の日本社会の混乱と人心の荒廃の原因となっているだけでなく、他方私どもの歴史認識を鈍らせて、戦後六十年を経てなお侵略に

対する謝罪と補償の責任を果たし得ず、靖国参拝や教科書問題、あるいは政治家の妄言など、度重なる醜行は日本への不信と怒りを増大させるばかりで、何とも申しわけなく、恥ずかしい限りで、皆様のご海容を請うのみです。

私は日本が、計らざる摂理によってこの平和憲法を与えられたのですから、ぜひともその厳正な実施をもって世界の「非武装平和（良心的軍事拒否）国家」と成ってほしい、そのことによって、失われた近隣諸国の信頼を回復し、ひいては北東アジアの安定と世界の平和に少しなりと寄与するものでありたいと願います。

たしかに現実はいま申し述べたように、その理想を持ち続けることさえ絶望的に困難な状況にあります。しかし私どもは、希望を失うことなく、私どもがこの平和憲法の真の精神的支柱であると信じる、私どもの「キリスト教平和主義」に生きていきたいと願っております。

おわりにー二つの幸い

最後に、二つの幸いということを申し上げて、話を終わりたいと存じます。

一つは、無教会信仰に生きる幸いです。「九・一一」以降宗教が語られることが多くなりました。世界は宗教が満ち溢れている感があります。宗教と宗教との対立があり、一方宗教間対話が喧伝けんでんされます。「神」の名によって戦争し、「神」の為に生命をささげる人たちがいます。霊的熱狂フレイマイトイグムがあり、宗教的陶醉トランスがあります。

晩年の内村に「無宗教無教会」という短文があります、その中で彼は

イエスの教えは決して宗教でなかつた。それはこの世のいわゆる宗教とは全然質を異にするものであつたと言っています。私どもが「無教会の信仰」と呼んでいるものは、この宗教ならざる宗教のことです。先に引いた「霊と形」という論文では「形なきキリスト教の形」とか「純粹に霊的な信仰」と呼ばれているものです。

この宗教過剰の時代に、このとても宗教とは言えない「宗教」で生きることとは決して容易なことではありません。先程具本術先生が言われたように、私どもはマイノリティ（少数派）であらざるを得ない。つらいことでもあります。内村は、しかしこう言います。

形式主義が物質主義に陥るように、

が非現実性に陥る危険性はあ
るかも知れないが、その本質において
靈性は、あらゆる存在のなかで最も確
実なるものであり、健全な思考と有効
な行為の基礎として十分に頼ることが
できるものである。

私もはたとえ「小さな群れ」であつて
も、この「靈性」（無教会信仰）に徹するこ
とで、「恐れることなく」（ルカ一・二・三二）、
自由に、「宗教」とか「教会」という「宿營
の外に出て」（ヘブライ一三・一三）、「非現
実性に陥る危険性」と戦いつつ、「健全な思
考と有効な行為」とを駆使して、イエスの
福音に生き、神の国の為に働くことができ
るのではないだろうか。まことに幸いな
ことではありませんか。

第二は、出会いの幸いということ。
人生は出会いと申しますが、聖書でも「
出会い」は大切な出来事です。その典型的な
事例は「ヨハネ福音書」一章の後半（三五
〜五一）で、そこにはイエスと最初の弟子
たちと、さらに弟子たちどうしの出会いが、
実にいきいきと描かれています。ここで「
出会った」と訳された原語は「ヘウリスコ
ー」で、有名なアルキメデスが浮力の法則
を発見した時、喜びの余り裸で風呂からと

び出して「ヘウレカ」（我発見せり）と
叫んだという、あの語です。

さて、きょう私の話を通訳して下さい
いる曹亨均先生に、私は一九八三年夏初め
てお会いしました。その出会い以来今日ま
で、私は先生からただならぬ友誼をいただ
いております。先生の日本語は私などより
ずっと確かで美しい、格調の高い日本語で、
その日本語を用いて多くの無教会の先生方
の本の翻訳をはじめ、各方面で韓日友好の
為に力を尽くしておられることは、皆様よ
くご存知の通りです。

劉熙世先生に私が初めてお目にかかった
のは、一九八五年東京で開催された「無教
会夏期懇話会」の席上でした。その時先生
は韓国の無教会について報告されたのです
が、最後に、「無教会の陣営は主イエスのゲ
リラ部隊となつて主の戦いにはせ参ずる。
ゲリラ部隊の特定は指令官（イエス）直属
である」と言われたのが忘れられません。
その後もいろいろな集會でのお話で、ご教
示をいただけてきました。

いま私は、以前から存じあげているお二
人の先生方との出会いの話をしました。無
教会は形なく、儀式なく、教義なく、会堂
なく、組織・制度もないところで、信仰の

みの共同体を形成します。そこにあるもの
は、信徒のコイノニア（交わり）であり、信
徒どうしの出会いであるとすれば、私どもの
エクレシア（教会）は「出会いのエクレシア」
なのであります。それは今回もいまここで、
私どもみながお互いに経験しあい、感謝し
あっているものです。

そして、この幸いを一層確かなものにし
ているもう一つの事実があります。聖書の
「出会い」と言う語（ヘウリスコー）は、も
ともと「見つける、発見する」と言う意味
で、「ルカ福音書」一五章の有名な三つの譬
え話に出てきます。「見失った羊を見つけ
た、無くした銀貨を見つけた、息子はいな
くなつていたのに見つかった」と。ここで
大切なことは、羊も銀貨も息子も「見つけ
られた」、すべて受動態であることです。羊
と銀貨と息子が私どもに、羊飼いと女と父
親が神に擬せられるとすれば、私どもは神
によつて見つけられる、神は罪の中に失わ
れている私どもを見つけて下さる。私ども
がイエスに出会ふのでなく、その前に（ヨ
ハネ一・四八）イエスが私どもに出会つて
下さると言うことです。そして発見の「喜
び」はまず見つけた側にあるということだ
す（ルカ一五・三二）。

(所載) 「清瀬通信」第301号

二〇〇五年一月

清瀬通信社

無教会の信仰は「人の救われるはその行為によらず信仰による」との信仰でありますが、さらに内村の言葉によれば、「信仰そのものが神の賜物である」という信仰です。これこそが「喜び」のおとずれ(福音)であり、ここに「出会いの幸い」の極致があります。

内村に出会って五十年余、わたしもまたこの二つの幸いに与かって生きてくることのできたことを無上の幸いと心から感謝しています。個人的な話を長時間ご清聴下さいまして、まことに有難うございました。

○これは二〇〇五年八月一日、韓国忠清南道洪城市の「ブルム学園」に於いて開催された「韓国無教会夏期集会」における講演を、後日改めて起稿したものである。

○内村の文章の引用は教文館版『内村鑑三全集』、英文は『内村鑑三英文論説翻訳篇下』(道家弘一郎訳、岩波書店、一九八五年)による。ただし引用箇所のは省略した。

○韓国語への通訳は曹亨均氏であった。